

小形三相誘導電動機の標準化

明電舎

- 住所
東京都中央区湊3丁目9番地付近
- 交通アクセス
JR京葉線 八丁堀駅 500m

■ 明電舎

明治39年（1906）、明電舎は、5馬力（3.8kW）以下の三相誘導電動機を独自の設計法をもって標準化し、汎用電動機として開発・商品化しました。

当時、この電動機は「明電舎モートル」の名称で呼ばれて全国に販売され、日本産業界の工場動力の電化に大きく貢献しました。現・株式会社明電舎のルーツです。

明治30年（1897）、これまで勤めていた三吉電機工場*が、日清戦争後の反動不況により解散に追い込まれた際に、部下数人とともに独立した重宗芳水により、東京・京橋区船松町11番地（現在の中央区湊3丁目）に設けられました。

* 三吉電機工場：重宗芳水とは遠縁にあたる三吉正一が、明治16年（1883）、「三吉工場」として創設し、後に社名を「三吉電機工場」と改めた、わが国最初の電気機械製造工場です。わが国第一の電気機械製造工場として発展しますが、日清戦争後の反動不況により経営に行き詰まり、明治31年（1898）に解散に追い込まれてしまいます。

■ 当時の地図での場所

図1は、重宗芳水が明電舎を設けた年の2年前、明治28年（1895）の地図です。明電舎が創立された東京・京橋区船松町11番地は、住所表示から「明電舎」と追記した赤丸印のところになります。

右端は隅田川で、正保2年（1645）から昭和39

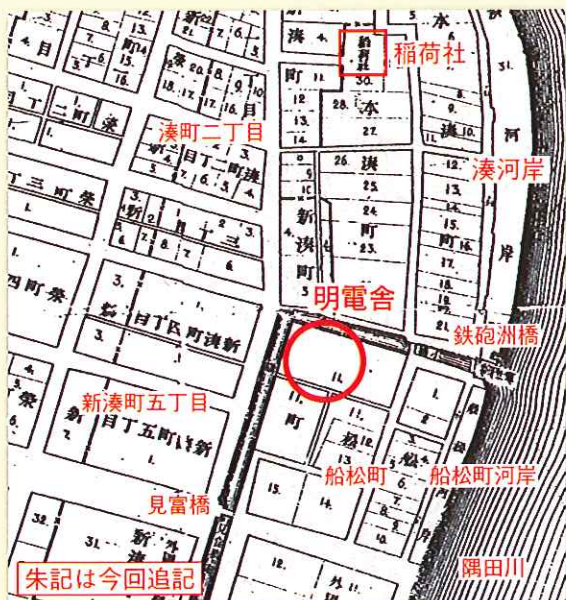
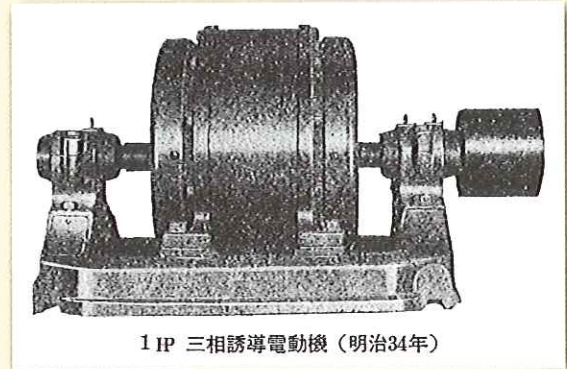


図1 明治28年の地図 国立国会図書館蔵



1 IP 三相誘導電動機（明治34年）

写真1 1馬力の三相誘導電動機（明治34年製）
出典 明電舎技術史 1972

年（1964）の佃大橋完成まで、船松町河岸から佃島へ、約300年間渡し舟が通っていました。

■ 現在の状況

明治時代の地図（図1）を参考に、現在の地図（図2）において、明電舎の位置を追うと、川が埋められ道路に、また、新たな道路も造られていますが、道路区画と鉄砲洲稲荷神社の位置などから、赤丸印のところになります。

現地を訪ねたところ、明電舎のあった場所は「民衆堂ビル」などが建っており、住所は中央区湊3丁目9番でした。

辺りを調べてみましたが、明電舎があったことを偲ぶようなものは見当たりませんでした。なお、



図2 現在の地図

この地域は戦災に遭っていないこともあり、古い木造家屋が未だ多く残っています。



写真2 明電舎跡 北西方向から撮影



写真3 船松河岸跡 佃大橋脇から撮影
良く整備された河岸テラスになっています

■重宗芳水と明電舎

重宗芳水（しげむね ほうすい、1873～1917）は、吉川藩の裁縫を家業とする貧しい江木清高の次男として、周防国岩国町（現在の山口県岩国市）に生まれました。幼くして父親を亡くし母の生家重宗家の養子になりました。明治20年（1887）、小学校を卒業すると、遠縁にあたる三吉正一が経営する東京三田四国町の三吉電機工場に、住込み徒弟として上京しました。満14歳でした。

一年後、三吉正一の勧め（費用）で夜間の工手学校（現在の工学院大学の前身）に通学しました。「電気は工場で勉強できるから、将来、設計図を引ける技術者になるため」と機械科を選びましたが、芳水にとって結果的に良い選択になりました。

明治27年（1894）、芳水20歳、工場の電灯電力機械部主任に大抜擢されるほどの活躍をしますが、その3年後の明治30年（1897）、前述のとおり、日清戦争後の反動不況で三吉電機工場が解散する事態となり、部下数人とともに独立しました。工場建屋は、大工が住んでいた建坪20坪2階建の民家で、床板を剥して機械を置きました。

日露戦争が勃発する明治37年まで続いた長期不況下での独立で、仕事も少なく苦勞をしましたが、電気機械の修理、小型開閉器、電灯器具の製



写真4 渡船場跡碑 佃大橋右岸脇

作より始め、変圧器、発電機、電動機などの製作へと発展させていきました。

■動力電化と明電舎モートル

明治40年（1907）、東京電燈駒橋水力発電所からの送電が始まりました。この豊富な電力は、電気料金の大幅値下げや交流昼間電力の一般需要家への供給を可能にし、中小工業部門における動力の電化を促し、小形モーターの需要は一段と高まりました。

芳水は、独自設計法による標準・汎用形の小形三相誘導電動機の商品化を進め、また、月賦販売・賃貸などの営業強化も行い事業拡大に努めました。これにより、「明電舎モートル」として巾広く支持されるようになり、明治末には中小企業を中心に市場をほぼ独占する花形製品になりました。

ところで、この「明電舎モートル」が顧客に歓迎された特性としては「機械に不慣れな素人・日本人向けの、かなりの過負荷にも耐えられるなど多くの使い易さを備えていた」と伝えられています。

明治38年（1905）、近くの明石町に建坪300坪の工場を建て移転、大正元年（1912）、事業拡大のため大崎に移転、大正6年（1917）、株式会社化し現在に至っています。

<補記> 芳水は44歳で没し、会社は妻の「重宗たけ」が引継ぎ事業の発展に尽くします。妻は芳水の遺志のもと学校を創立し後に寄贈します。この学校は現在も存続しており、品川区立芳水小学校として「芳水」の名を残しています。



図3 大崎工場跡と芳水小学校
地域再開発のため工場は移転し、新しい街「シンクパーク」になっています。